

# 精神労働と肉体労働との規定について

中内清人

はじめに

1. 精神労働と肉体労働との規定についての諸論
  - (1) 両労働間の分業・対立の廃棄ないしは両労働の統一にかんする諸主張
  - (2) 両労働の規定においてみられる特徴
2. マルクス、エンゲルスによる精神労働と肉

体労働との規定

- (1) 社会的分業次元での両労働
  - (2) 生産体内分業次元での両労働
  3. 精神労働と肉体労働との統一についての諸見解
- むすび

## はじめに

その言葉の意味する内容が行為の目的とされているときには、その言葉の意味を十分に検討することが必要であろう。精神労働、肉体労働という言葉も、そのような検討を要する言葉である。

精神労働と肉体労働との分業の廃棄、ないしは統一という行為が、社会主義での目的の一つとして主張されながらも、その言葉からは、のちに指摘するような重要な内容が欠落しているばあいが多いと思える。不十分な規定を前提としての両労働の統一のための行為では、統一をもたらしすることは困難と思える。それを規定した人間が同時に政治的権力の掌握者であるばあいには、なおのことそうである。

1980年代に、社会主義社会は大きく変貌し、また解体した。支配者に対する人民の不満と怒りは大きな反抗となった。1989年12月24日、ルーマニアでの変革の日、「このクリスマス・イブにも、自由と人権のために血を流して戦っている人達のあることを、心にとどめておいてほしい」というアナウンサーの声は厳粛に響いた。

自由や人権が真に拡大されるされていた社会主義社会で、なにゆえその反対のことが生じていたのか。このことは、人間そのものの問題としても、指揮者の資質の問題としても、体制とそれを支えていた理論と政策の問題としても、等々多面的に論じられなければならないことと思える。精神労働と肉体労働という言葉の規定の検討にしても、それらの言葉を含む理論そのものの研究や、両労働の統一が重視されながらも実現するに至らなかった原因や、不十分な規定に至った過程を、具体的・歴史的に検討することが必要であろう。しかし本稿ではその考察を、マルクス、エンゲルスの古典は精神労働と肉体労働とをどのように規定していたか、そしてそれらは社会主義国等でどのように狭隘化されているか、そしてその現在の規定がどのよう

な問題を含んでいるか、これらの点に限定した。かつて私は精神労働と肉体労働とについて的小論を発表した<sup>1\*)</sup>。本稿の論点も基本的には、前稿と類似のものであり、内容に重複のあること、あらかじめおことわりしておきたい。

なおこの言葉の規定の検討は、資本主義を前提としても重要と思える。なぜなら、たとえば、ME化が進展し、従来重筋肉労働を必要としていた分野においても、そのような労働が相対的に減少してきた、このような事態を前にして、精神労働の増加、肉体労働の精神労働化が進展しているとする見解がみられるからである。だがこの変化を肉体労働の精神労働化と言うならば、そこにはやはり、それぞれの言葉の規定から重要な部分が欠落しており、したがって、肉体労働の精神労働化の意味の矮小化がなされていると思える。

## 1. 精神労働と肉体労働との規定についての諸論

### (1) 両労働間の分業・対立の廃止ないしは両労働の統一にかんしての諸主張

産業革命の進行と共に、主要な労働手段は機械となり、労働者は「産業的無窮運動機構」たる機械の下で、長時間の苛酷な労働を強制されるようになった。この状態からの労働者の開放を重要な課題としたユートピア社会主義者達は、理想的な社会と労働の在り方を構想した。たとえばフーリエ(1772~1832)は、ファランジェを組織し、そこでの「魅力ある労働」を理想とした。彼は、「もし人間が十二時間にわたって、単調な労働、機織り、裁縫、筆写やその他、肉体と精神のすべての部分を連続的にはたらかすのではない労働に従事するならば、健康は必然的に害される。この場合、耕作という活動的な労働によってさえ、事務労働によってと同じように病害が生じる」とし<sup>1)</sup>、また、「肉体と精神の各機能を順順にはたらかせることによって、すべての機能に活動力と均衡とを持続させるのである」とした<sup>2)</sup>。このような主張を前提にしてフーリエは、「一時間半、長くても二時間というきわめて短い時間に従って活動することによって、だれもが、一日の間に七ないしは八種類の魅力的労働を行ない、次の日には変化を与え、前日の集団とは異なる集団と交際することができる」<sup>3)</sup>ような「協同社会」を理想とした。

ユートピア社会主義者達を空想的とした、マルクスやエンゲルスも、両労働の統一の必要性を主張した。たとえば『反デューリング論』において、「労働が分割されるとともに、人間もまた分割される。ただ一つの活動を発達させるために、他のすべての肉体的および精神的な能力が犠牲にされる。分業がすすむにつれて、人間のこのような発達の障害もますます強ま

1\*) 拙稿「『精神労働』と『肉体労働』について」(『立教経済学研究』第30巻第3号、1976年12月)。

1) フーリエ『産業的共同社会的新世界』、田中正人訳、p.510、1975年(中央公論社『世界の名著続8』)。

2) 同、p.511。

3) 同、p.501。

る<sup>4)</sup>とし、共産主義社会は「各人にそのいっさいの肉体的および精神的能力をあらゆる方向に発達させ発揮する機会を提供することによって、人間を開放する手段となり、こうして、かつては重荷であった生産的労働がたのしみになる、そういう生産組織である。」<sup>5)</sup>としている。

そして『ドイツ・イデオロギー』では、「労働が分割されはじめるやいなや、各人は、ある特定の活動範囲だけにとどまるようにしいられ、そこからぬけだすことができなくなる。かれは猟師、漁夫、または牧夫、または批判的批評家のいずれかであって、生活のてだてを失うまいと思えば、どこまでもそのいずれかでありつづけねばならない、——これに対して共産主義社会では、各人はそれだけに固定されたどんな活動範囲をももたず、どこでもすきな部門で、自分の腕をみがくことができるのであって、社会が生産全般を統制しているのである。だからこそ、私はしたいと思うままに、今日はこれ、明日はあれをし、朝に狩猟を、昼に魚とりを、夕べに家畜の世話をし、夕食後に批判することが可能になり、しかも、けっして、猟師、漁夫、牧夫、批評家にならなくても良いのである。」<sup>6)</sup>としている。

『ゴータ綱領批判』において、「精神労働と肉体労働との対立(Gegensatz)がなくなったのちに、労働がたんに生活のための手段であるだけでなく、労働そのものが第一の生命欲求となったのち、個人の全面的な発展にともなって、またその生産力も増大し……」<sup>7)</sup>とし、精神労働と肉体労働との対立の消滅と、第一の生命欲求への労働の変化、個人の全面的な発展、そして生産力の発展、これらとの関連を述べている。

『資本論』では、「ある種の精神的および肉体的奇形は、社会の分業全般からも不可分離なものである」<sup>8)</sup>と、その弊害が述べられている。

またレーニンも「階級を完全に廃絶するには、……肉体労働者と精神労働者の区別をも廃止する必要がある。」<sup>9)</sup>としている<sup>10)</sup>。

このように、精神労働と肉体労働との対立の消滅、両労働の分業の廃止ないしは統一の必要

4) 『マルクス・エンゲルス全集』第20巻, p.300 (邦訳ページ数, 以下も同じ), 大月書店。

5) 同, p.302。

6) マルクス・エンゲルス『新版ドイツ・イデオロギー』花崎皋平訳, pp.67~68, 1966年, 合同出版株式会社。

7) 『マルクス・エンゲルス全集』第19巻, p.21。

8) マルクス『資本論』第一部, 長谷部文雄訳, p.601 (邦訳ページ数, 以下も同じ), 青木書店。

9) 『レーニン全集』第29巻, p.425 (邦訳ページ数, 以下も同じ), 大月書店。

10) 分業による不具化は労働者にばかり生ずるのではないと指摘されている。すなわち、「労働者ばかりでなく、労働者を直接または間接に搾取する階級もまた、分業を通じて、自分の活動の道具に隷属させられる。頭の空っぽなブルジョアは、自分自身の資本と自分自身の利潤欲との奴隷となる。法律家は、自分の化石化した法観念の奴隷となり、これらの法観念が一つの独自の力となって彼らを支配するようになる。一般に『教養ある身分』は、さまざまな局所的な狭さや一面性の、また自分自身の肉体的および精神的近視性の奴隷となり、また、一つの専門に適合させられた教育を受けて、この専門そのもの——その専門というものがまったくのらくら生活である場合にさえ——に一生涯しばりつけられる結果、不具化して、自分のこの不具化の奴隷となる」(『マルクス・エンゲルス全集』第20巻, p.301)。

性は、現在にいたるまで、多くの人によって主張されてきた。しかし現在、資本主義においてはもちろん社会主義においても、両労働の分業と対立は消滅しておらず、また両労働の統一もなされていない。そして、精神労働と肉体労働という言葉のそれぞれの意味が、厳密に規定されているとも思えない。いくつかの規定を検討しよう。

## (2) 両労働の規定においてみられる特徴

まず、精神労働と肉体労働との具体例として、多く挙げられているものをみよう。

スターリンは両労働者の具体例として、「労働者の文化的・技術的水準を技術職員の水準までたかめることによって精神労働と肉体労働とのあいだの本質的な相違を絶滅する」という文章や、「労働者の敵としての、支配人や、職長や、技師や、技術職員」<sup>11)</sup>という文章においてみられるごとく、精神労働者として、支配人、職長、技師、技術職員を挙げている。

ソ連邦『経済学小辞典』は階級社会での精神労働の例として、「精神労働の仕事(科学、芸術、政治活動など)」を、また社会主義でのそれとして「技師・技手」を挙げている<sup>12)</sup>。

森宏一編『哲学辞典(増補版)』は、「精神労働(学者・芸術家・僧侶・教師・医師・弁護士、さらにさまざまな技術に関係する技術家などが、これに属する)」としている<sup>13), 14)</sup>。

さて以上の具体例においてみられる特徴は、さしあたり、次の二点にあると思える。一つは、社会的分業次元でと、生産体内分業次元でとに区別されることなく、精神労働と肉体労働という言葉が使用されている点である。

だが、精神労働と肉体労働との分業は、社会的分業次元でと生産体内分業次元でとは、次節でみるごとく異なる要因によって発生したものであり、これらは区別して考察する必要があると思える。

11) スターリン『ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』, p. 35, 1953年, 国民文庫社。

12) コズルフ・ヘルブーシン編『経済学小辞典』, ソビエト研究者協会訳, 1960年, 青木書店。

13) 森宏一編『哲学辞典(増補版)』1976年, 青木書店。

14) 芝田進午氏は、「精神的労働は、生産過程とのつながりからみて」として、生産過程との関連を重視して精神労働を分類しておられる。(1)直接的生産過程の一環をになうもの=技術学的労働、組織的(指揮)労働、管理労働、生産部門における伝達労働。(2)普遍的生産過程の一環を担うもの=自然科学的労働、労働の組織化・経済の計画化のための社会科学的研究労働など。(3)不生産的であるが社会労に有用なもの=教育労働、医療労働、一部の公務労働、コミュニケーション労働など。(4)芸術的労働。(5)社会的に寄生的な精神的労働、イデオログの労働、僧侶の労働、弾圧的機能とむすびついた一部の公務労働など、としておられる。

みられるように氏は、生産過程との関連を重視して、精神労働を分類しておられる。

なお、人間の労働は精神労働の肉体労働との統一であり、「神経と頭脳のエネルギーの支出である精神的労働(頭脳労働)の要素をふくまない労働はない」と指摘しておられる。そして「階級の歪み」を捨象した精神労働の特徴の一つとして、「対象を反映し、観念的に構成し、制御し、目的を設定する能力をもち、創造的性格をもつ」としておられる。(大阪市立大学経済研究所『経済学辞典 第2版』p. 771, 1979年, 岩波書店)。

二つめは、「労働過程における脳と神経力の支出」を必要とする労働を精神労働とし<sup>15)</sup>、「主に、肉体エネルギー、筋力を必要とする労働力の支出」を肉体労働とする<sup>16)</sup>という、一般に広く用いられている、主に使用する労働能力の種類によって両労働を分類する規定を、採用している点である。

労働とは労働力の使用であり、労働力は肉体的能力と精神的能力との総計であるとはいえ、このように、労働において使用する人間の肉体の部位によって、両労働を区分することには、後に見るごとく、それが両労働間の分業の廃棄や統一を課題として論ぜられるときにはとくに、重要な問題をもたらすと思われる。このいずれを欠いても労働はありえないのであり、考えられねばならないことは、後に見るごとく、両能力、とくに精神的能力がどのような関係の下においてどのように使用されるかということである。

つぎに、ここで検討した諸見解が、基本的にはそれに依拠していると思われる、マルクス、エンゲルスの著作において、両労働がどのように規定されているかを考察しよう。

## 2. マルクス、エンゲルスによる精神労働と肉体労働との規定

### (1) 社会的分業次元での両労働

社会的分業は、「生理学的基礎」による「自然発生的分業」と「相異なる家族や種族や共同体」間の生産物の交換とにその起源があり、「真の分業」は「物質的労働 (materielle Arbeit) と精神的労働 (geistige Arbeit) との分割があらわれる瞬間から」始まる<sup>17)</sup>と、マルクス、エンゲルスは、『ドイツ・イデオロギー』において述べている。また、「分業とともに精神的活動 (geistige Tätigkeit) と物質的活動 (materielle Tätigkeit), 享受と労働, 生産と消費が、別々の個人に属する……現実性が、生ずる」<sup>18)</sup>とし、さらに、「物質的労働と精神的労働との最大の分業は、都市と農村の分離である。……都市の成立と同時に、行政、警察、租税などの、つまり自治共同体制度 (Gemeindewesen) の必然性が生ずる。直接に分業と生産用具とにもとづく人口の二大階級への分化が、まずここにあらわれた。……都市と農村の対立は、……個人の分業のもとへ、すなわちかれに強制された特定の活動のもとへの服属の、きわめて顕著な表現である」<sup>19)</sup>として、都市と農村との分離と共に、行政、警察、租税など、「社会の共同の業務」への特定の人間の固定化が生じると示唆している。そして「もっぱら労働に服するこの大多数者とならんで、直接の生産的労働から開放された一階級がかたちづくられ、彼ら

15) *Wörterbuch der Ökonomie Sozialismus*, S.159, 1960, Dietz Verlag.

16) *Ibid.*, S. 464.

1) 前掲『新版ドイツ・イデオロギー』, pp.61~62.

2) 同, p.63.

3) 同, pp.107~108.

が労働の指揮，国務，司法，科学，芸術などの，社会の共同の業務にあたる」<sup>4)</sup>ことが，すなわち特定階級が生じたとしている。このような二大階級への分化には，特定階級が直接の生産的労働から開放される水準まで，生産力が発展している必要がある。だがそれは同時に低い発達水準でなければならない。すなわち，「人間の労働の生産性が比較的に未発達だったという……事情によって……実際の労働に従っている住民が，自分たちの必要労働にあまりにも忙殺されていて，社会の共同事務——労働の指揮，国務，法律事務，芸術，科学など——に従う時間が彼らに少しも残されていないかぎり，いつでも，実際の労働から開放されてこれらの事務に従う特別の一階級が存在しなけりばならなかつた。」<sup>5)</sup>のである。

エンゲルスは階級区分の基礎には分業の法則があるとし，同時に，階級区分の形成には暴力，強奪，奸計，欺瞞があつたことは否定できないとし，「支配階級がひとたびその座にすわつたなら，かならず労働する階級を犠牲として自分の支配をかため，社会的指揮を大衆の搾取に変えてきた」<sup>6)</sup>と，社会の共同事務担当階級が，社会的指揮を大衆の搾取に変えたとともに支配階級となり，社会的分業次元での支配・被支配関係が形成されることを指摘している。

階級の発生は奴隷制に始まる。かつては戦争による捕虜は焼肉にされ，その後はただ殺されるのみとなり，のちになつて奴隷として利用されるようになり，この「奴隷制によつてはじめて，農業と工業とのあいだのかなり大規模な分業が可能となり，それによつて，古代世界の花であつたギリシア文化が可能になつた」<sup>7)</sup>とされている。「分業は，単純な手労働に従う大衆と，労働の指揮，商業，国務に従い，のちにはまた芸術や科学にたずさわつた少数の特権者とのあいだの大きな分業を基礎とするほかはなかつた……この分業の最も簡単な，最も自然的な形態が，ほかならぬ奴隷制であつた」<sup>8)</sup>のである。

以上の文章に，社会的分業次元での精神労働と肉体労働との分離とその固定化，支配階級の形成，および両労働の特徴が示されている。要約すれば，先ず，真の分業である精神労働と肉体労働との分離は，生産力の特定発展段階において始まり，その最大のものは都市と農村との分離である。さらに，分離した精神労働者の一部は社会的指揮を担当し，それを搾取の機能に転化し，肉体労働担当者を支配する。精神労働は特定の人間に固定化し，その人間は一階級を形成する。精神労働には，国務，行政，司法，租税，警察，法律事務，労働の指揮，商業，芸術，科学，等の労働がある。これらには，階級支配の直接的な機能を担当するものが含まれている。精神労働者は支配階級となり肉体労働者を搾取する。この最も簡単な形態は奴隷制である。したがつて，社会的次元での精神労働と肉体労働との分業と対立，およびその廃棄ないし

4) 『マルクス・エンゲルス全集』第20巻，p.290。

5) 同，p.188。

6) 同，p.290。

7) 同，p.187。

8) 同，p.188。

は統一を考察する場合には、それが一定の生産力水準と結合して発生した階級関係、支配・被支配関係と、不可分に結合していることが指摘されていることを忘れてはならない。

なお、現在、精神労働、肉体労働といわれている労働のうち、社会的分業次元でのものを、マルクス、エンゲルスは、精神的労働（活動）と物質的労働（活動）としている<sup>9)</sup>。

## （２）生産体内分業次元での両労働

つぎに『資本論』にそって、資本制社会での生産体内次元での精神労働と肉体労働との分離を考察しよう。

資本制社会の生産体内における労働過程での、「手労働」と「精神的諸能力」<sup>10)</sup>との分離についてマルクスは、「部分労働者たちにたいし、物質的生産過程の精神的諸能力 (geistigen Potenzen) を他人の所有として・また彼らを支配する力として・対立させるということは、マニュファクチャ的分業の一所産である。この分離過程は、資本家が個々の労働者に対立して社会的労働体の統一と意志とを代表する単純協業において始まる。それは、労働者を部分労働者へと欠朽せしめるマニュファクチャにおいて発展する。それは科学を自立的な生産力能として労働から分離して資本に奉仕させる大工業において完成する」としている<sup>11)</sup>。

またほぼ同じ趣旨のことを「生産過程の精神的能力が手労働から分離するということが、および、この能力が労働にたいする資本の権力に転化するということは、すでに以前に示唆したよ

9) 芝田氏は『『精神的労働』と『精神的生産』は無関係ではないが、明確に区別されるべき概念であり、同一視されたり、混同されたりしてはならない。精神的労働は物質的・生産的労働の不可欠の1モメントでありうるが、精神的生産はかならずしもそうではない」といっておられる(『増補改訂・現代の精神的労働』, p.73, 1962年, 三一書房)。しかしマルクスは、たとえば『資本論』や『剰余価値学説史』において、自然科学を「精神的生産」あるいは「精神的労働」という言葉で表現している。例えば次のように使用している。

「ある生産たとえば鉄・石炭・機械・の生産や建築術などにおける労働の生産力の発展が、——これは部分的にはさらに精神的生産ことに自然科学およびその応用の領域における進歩と関連しうる——、他の産業部門たとえば繊維工業または農耕における生産手段の価値したがって費用の減少の条件として現象する」(『資本論』第三部, p.144)。

「かの生産力の発展が帰着するところは、結局はつねに、活動させられる労働の社会的性格であり、社会内の分業であり、精神的労働ことに自然科学の発展である」(同, p.145)。

「精神的労働の産物—科学」(『マルクス・エンゲルス全集』第26巻1, p.441)などである。マルクスは、「精神的生産」と「精神的労働」という言葉を同じ内容で使用している。芝田氏は、「精神的労働」という言葉をさきにみた「精神的諸能力」の意味で使用しておられるように思える。

10) 「精神的諸能力」という言葉と共に、「頭の労働」と「手の労働」という言葉も物質的生産過程において使用されている。「労働過程は頭の労働と手の労働とを合一する」(『資本論』第一部, 長谷部訳, p.803, 青木書店)や労働能力が直接的生産過程に「非常にさまざまな仕方に参加し、一方の者はより多く手で労働し、他方のものはより多く頭で労働し……」(『直接的生産過程の諸結果』岡崎次郎訳, p.111, 大月書店)などである。

11) 『資本論』第一部, 長谷部訳(一部改変), p.599。

うに、機械を基礎として建てあげられた大工業において完成される」<sup>12)</sup>と述べている<sup>13)</sup>。

マルクスは、この「分離過程」のはじまったとされる単純協業を、「同じ生産過程において・または相異なっているが連絡のある諸生産過程において・計画的に相並び相共に労働する多数者の労働の形態」<sup>14)</sup>としている。また、単純協業がその端緒形態である資本制生産について、「より多数の労働者が、同時に同じ空間で（または、同じ労働場所でもいってもよい）同じ種類の商品の生産のために同じ資本家の指揮のもとで働くということは、歴史的および概念的に資本制的生産の出発点をなす」<sup>15)</sup>とし、区別（「同職組合的手工業」などからの）はさしあたり「量的」だとしている。「量的」ということによって、従来と生産方法において質的变化のないこと、すなわち、道具が労働手段であること、熟練に変化のないこと、分業の存在しないこと、等が示唆されていると思える。しかし、この「量的」な区別の形成過程が同時に、「精神的諸力能」の分離過程でもある。

それでは、単純協業においては、それ以前の生産形態と比較して、どのように「精神的諸力能」が「手労働」から分離したのであろうか。

マルクスは「労働過程の終わりには、その初めに当りすでに労働者の表象のうちに・つまりすでに観念的に・現存していた一の結果が出てくる」<sup>16)</sup>としている。人間の労働の動物的・本能的な形態を無視すれば、人間は労働過程の初めにおいて、労働の結果を、頭脳に、観念・表象に、描写し、計画を作成していなければならない。描かれた成果に基づいて具体的に計画を立て、労働目的を実現しなければならない。すなわち、労働には労働成果を表象し労働目的を設定する能力が不可欠である<sup>17)</sup>。

12) 同, p. 685。

13) この「分離過程……」の文章について中岡哲郎氏は、「装置の完成」にともなう「労働者の熟練の消滅」や「作業者の判断—行動領域」の縮小が、「マルクスが〈生産過程の精神的力能が手労働から分離する〉と書いた」（『工場の哲学』, p. 107, 1971年, 平凡社）ことの内容だとされる。

しかしマルクスは、前掲の文章で、生産過程からの「精神的諸力能」の分離は、協業で始まりマニファクチュアで発展するとしている。協業もマニファクチュアも、生産手段として道具が使用される段階である。他方、中岡氏が「装置の完成」にともなう「労働者の熟練の消滅」と言われるばあいの装置は、機械制大工業段階のもと考えてよく、この点のみから判断しても、このマルクスの文章の意味は、中岡氏の主張で表現されていることとは思えない。すなわち、中岡氏の言われる「作業者」は、機械制大工業確立後の「作業者」であり、マルクスがここで言っている「労働者」には単純協業段階の労働者も含まれている。したがって、中岡氏の言われる「作業者」とはその段階が異なり、「精神的諸力能」の発揮分野がことなるのである。

14) 『資本論』第一部, p. 548。

15) 同, p. 543。

16) 同, p. 330。

17) 内田義彦氏は、『資本論』の労働過程を説明され、「マルクスは、目的定立をし、自分の目的に従って労働の過程を指揮する営みを精神労働、それに従って精神や筋肉を動かす仕事を肉体労働と名づけています」とされ、「精神労働と肉体労働が分化するのは私有財産制度とともに始まる」とされる。ここで内田氏が「精神労働」、「肉体労働」とされるものは、すでに述べた「精神的諸力能」の発揮

マルクスはさきの文章につづいて、社会形態とは関係なく、労働過程の一般的性格をつぎのように述べている。

「労働はさしあたり、人間と自然との間の一過程、すなわち、それにおいて人間が人間の自然との質料変換を彼自身の行為によって媒介し・規制し・統制する一過程である。……彼は自然的なものの形態変化のみを生ぜしめるのではない。彼は自然的なもののうちに、同時に、彼の目的——すなわち彼の知っている・法則としての彼の行動の仕方様式を規定する・それに彼が自分の意志を従属させねばならぬ・彼の目的——を実現するのである。しかも、この（目的への意志の）従属は、ただそれだけの行為ではない。労働する諸器官の緊張のほか、注意力として発現する合目的な意志<sup>18)</sup>が必要であると。

この文章でマルクスは、生産関係とは無関係に、労働における人間と自然との関係（人間の自然への働きかけ）を述べている。したがってここで人間が、それに自らの行動様式と意志とを従属させねばならない目的は自ら設定したものとみなしうる。したがって人間は、自ら設定した目的に、自ら行動方法を規定され、合目的に意志を従属させ、労働する諸器官を緊張させ、注意力を発揮し、そして自ら設定した目的を実現する。主体的に表象した成果、自ら設定した目的に応じて自然の一部を変え（形態変化・質量変換を媒介・規制・統制）る。これが、この文章でいわれている労働のあり方、すなわち、他から強制されていない内発的な労働であるといえる。

たとえば独立農民や手工業者は、自ら設定した目的達成のために知識や、洞察や、意志を発揮して労働する。もちろん彼等も商品生産者としては、なにを何時いかに生産するか等を決定するに際しては、市場・「競争の権威」を考慮しなければならず、その使用価値だけを目的にして、労働目的を設定することはできない。しかし、市場・「競争の権威」を前提とすれば、他から自由に目的を設定し、かつ行動様式や目的への意志の従属なども自発的におこなって、労働をしうるし、しなければならない。また、共同体の特殊な手工業者も、伝統的な仕方に従うとはいえ、自分の作業場では自分の専門に属するあらゆる作業をどんな権威も認めることなしに独立的に行いうるし<sup>19)</sup>、行なわねばならない。すなわち「労働過程が純粹に個人的な過程

---

と「手労働」のことであり、したがって、生産体（企業）内分業次元での「精神労働」と「肉体労働」であると思える。したがって、「精神労働と肉体労働が分化するのは私有財産制度とともに始まる」とされるべきではなく、生産体内での協業とともに「分化」の可能性があり、「私有財産制度」とともに現実化し、固定化するとされるべきではなかろうか。もし、「私有財産制度とともに始まる」という点を重視されるならば、氏のいわれる「精神労働」と「肉体労働」はそれぞれ、社会内分業次元での「精神的労働（活動）」と「物質的労働（活動）」とを意味するものといえよう。内田氏もまた、次元の異なる二つの「精神労働」と「肉体労働」という言葉を区別することなく用いられるように思える（内田義彦『資本論の世界』、pp.110～111、岩波書店）。

18) 『資本論』第一部、pp.329～330。

19) 同、p.594。

たるかぎりでは、同じ労働者が、のちには分離されるすべての機能を合一<sup>20)</sup>しているのである。個々の人間は労働過程で、精神的能力と肉体的能力との全機能を総合的に発揮することができるし、また発揮しなければならない。この段階で人間は、「のちには、それらが分離して敵対的対立を生ずる」とされている「頭の労働と手の労働とを合一」し、「自分自身を統制」し、「彼自身の脳髓の統制下に彼自身の筋肉を活動させ」て、「自然に働きかけ」でいるのである。さて、単純協業ではどのような精神的力能の発揮が分離するのであろうか。

単純協業をも含めて一般に、大規模な、直接に社会的または共同的な労働においては、個別的諸活動の調和をはかり、生産体の個々の諸器官の運動とは違った、生産体全体の運動から生ずる一般的諸機能を果たすために、指揮が必要となる。たとえば、「ヴァイオリンの独奏者は自分自身を指揮するが、オーケストラは指揮者を必要とする。指揮・監督および媒介というこの機能<sup>21)</sup>が必要となる。

労働に目的が必要のように、オーケストラも演奏曲を選定する必要がある。この選定曲の演奏のためには、メンバーが指揮者の下で協力する必要がある。選定曲や演奏方法などが、メンバーの欲求に合致しているかもしくは両者を合致させうるか否かが、メンバーの積極性を決定する重要な要因となる。それは、労働の目的や労働方法のあり方などが、「労働者が労働を彼自身の肉体的および精神的諸力の働きとして享受する」<sup>22)</sup>度合を決定するのと同じである。

すなわち、選曲（労働目的の設定）が能動的・自発的であったか否かが演奏（労働）が精神の内的刺激によっておこなわれるか、主として報酬などの外的刺激（ときとして他人の強制）によっておこなわれるかを決定する大きな要因である。そして、内的刺激によっておこなわれるばあいは、「労働諸過程の社会的な結合は労働者の個人的な活気・自由・および自立性」<sup>23)</sup>のより一層の昂揚をもたらし、またこれによって、個人的諸能力がさらに高められる。

資本制協業は、労働力の商品化が前提となっている。労働力 = 商品の市場において、労働力商品の売手と生産手段の所有者である買手との関係は、形式的には対等であるが、実際には、生産手段の所有や相対的過剰人口の存在を背景に、傾向的に買手優位である。売買契約成立後の生産過程では、労働者は「資本の特殊な実存様式」にすぎず、名実共に「資本家のもつ無条件的権威」のもとで「資本家の意のままに」使用される。そこでは、「賃労働者たちの協業は、彼等を同時に使用する資本の単なる作用である。彼等の諸機能の連絡と生産的全体としての彼等の統一とは、彼等の外部に、彼等をよせ集めて締めくくっている資本のうちに、存する。だから、彼等の諸労働の連絡は、観念的には資本家の計画として、実践的には資本家の権威として、彼等の行為を自己の目的に従属させる他人の意志の力として、彼等に対応する」<sup>24)</sup>のであ

20) 同, p. 803.

21) 同, p. 555.

22) 同, pp. 330~331.

23) 同, p. 800.

24) 同, p. 556.

る。資本家が「社会的労働体の統一と意志」とを代表するのであり、労働者は「手労働」者としてのみの存在となり、彼は主体的に労働の成果を表象し労働目的を設定することが出来なくなる。資本に強制された目的がこれにとって代わる。労働者は資本の強制によって、資本の表象した成果、設定した目的に、労働の仕方様式を従属させ、また自らの意志を従属させることになる。かくして、労働者の労働への能動性と自発性は減少する。資本の支配下の故に、人間は自らの自然（頭、手、腕、足）のうちにある潜在的諸力能を自発的に発展させ、自らの統制下におくことを制限される。人間は労働能力を使用しないでそれを発展させることはできない。「生産的な衝動および素質」のいっさいはこのときから崩れはじめる。

かくして、単に「量的」な変化といわれた資本制協業とともに、労働者から分離したり、充分発揮することができなくなる「精神的諸力能」には、労働の成果を観念に表象し労働目的を設定する能力、労働力と生産手段とを合法的・合目的に結合する能力、合目的な法則に従って自らの行動様式を自発的に規定する能力、そして目的に自らの意志を自発的・合目的に従属させる能力などが含まれる<sup>25)</sup>。労働者から分離した精神的諸力能は資本家が発揮する。

---

25) たとえば中岡氏のごとく機械制工業段階での「装置の完成」―「労働者の熟練の消滅」ということをもってのみで「分離」を云々する場合は、『資本論』でいわれているところの「精神的諸力能」の基本的内容が矮小化され、氏が「精神労働」と「肉体労働」の「統一」を主張されるときも、それは基本的内容抜き「統一」になる可能性があるのではなからうか。

中岡哲郎氏は、熟練は手先の器用さや、カンとコツと強く結合しており、したがって非科学的だという見解は根づよいけれど、実際は「頭脳や知識」との結合度が高く「カンやコツといった言葉で表現されるよりはるかに複雑な総合的判断にもとづいている」（『工場の哲学』、p.106）と熟練を規定され、そして、「精神労働」と「肉体労働」の分裂は、この熟練の解体だとされる。すなわち「工場労働における熟練労働の分解は、まず労働の手作業部分と精神的部分の分離、つまり労働者と技術の分離からはじまる」（同、p.108）とされる。すなわち資本主義社会で「精神的部分」の代表者として、生産的労働をしているかぎりでの資本家をではなく、技術者をあげられる。

中岡氏が、オートメーションの進化とともに「肉体労働」から分離していくとされた「精神労働」はつぎのようなものである。「発展し、たえず新しくおこってくる事態に正確な対応をするための基本能力は、前段階の認識と現在眼前におこっていることとを結びつけて、次の段階におこることを的確に予測しそれに対する適切な処置を準備することである。それは……どんなに一見反射行動のようにみえても、深く精神の働きに支えられ、対象の性質に対する深い理解と思考の助けをかりてはじめて進行する過程なのである」（同、p.189）。みられるように氏は対象の自然的法則の認識と、その上にたつての判断を重視しておられる。その他「……加工の段階ではなくて、発展の段階なのだ。……全過程を一貫して知っていなければならない。現在は過去の全経過をはらんでいる。……加工の本質的に機械論的な性格に対して、知的活動、思考活動における全く異なった特徴が「弁証法的な」特徴が強く前面におしだされてくるのである」（同、p.190）といわれる。「本質的には一回かぎりの発展過程である知的労働の性格」（同、p.196）などといわれることからあきらかなように、中岡氏は、「知的労働」といわれるものは、対象の法則を熟知しており、新しい事態の発生、発展、変化に即応し、判断を下しうる労働と把えられているといってもよい。換言すれば、高度の判断を要する労働を「知的労働」といっておられるようである。だから、高度の判断を要しない事務労働は「知的労働」に含まれないことになる。この点は同意しうる。（同、p.151。なお、内田義彦、『資本論の世界』、

独立小商品生産者と同じく、資本制商品生産社会では資本家も、市場・「競争の権威」に従わざるを得ない。しかしこれを前提として資本家は「精神的諸力能」を発揮し発展させることができる。資本家は、労働の成果を観念・表象し労働目的を設定し、それに労働者の行動・仕方様式を合法的・目的的に従属させ、また彼等の意志を従属させ、自らの目的を実現すること、つまり労働過程において、監督者および管理者として、「精神的諸力能」の発揮に専心することが可能となる。資本家は「価値増殖過程にある資本のいわば意志と意識とを与えられた機能をおこなうだけでよい」<sup>26)</sup>こととなる。労働者の失なったものは資本の側に集積し、労働者を支配するものに転化する。労働者は資本家の「専制」の下で、「精神的諸力能」を発揮する場面を失ない、したがってその能力を発展させる機会を失う。これがさきのマルクスの文章で、「単純協業」を修飾していた「資本家が個々の労働者に対立して社会的労働体の統一と意志とを代表する」ということの内容であろう。

この「精神的諸力能」の発揮の場とその発展の機会が労働者から奪われ、資本の側に蓄積される土台は、労働力と生産手段の分離——労働力の商品化にあることは以上よりあきらかである。

もちろん資本家が「手労働」(直接的労働)から解放されるためには、労働者が生産した剰余価値で、資本家とその家族の生活(個人的消費)の維持と、蓄積(拡大再生産)とが可能となる程度にまで、生産力が発達し労働者数が増加している必要がある。

また、この指導、監督、媒介すなわち指揮という機能は、資本に従属させられた労働が協業的になるや否や資本の機能になっていたものである。なぜなら、資本の指導という機能は、社会的労働過程の本性から生じたものであるとともに、社会的労働過程の搾取の機能から生じたものであるからである。すなわち、「資本家の指導は、社会的労働過程の本性から生じて資本家に属する特殊的功能であるばかりでなく、それは同時に、一社会的労働過程の搾取の機能

p.111)。

しかし中岡氏は「知的労働」の必要条件に、労働「目的」の設定を含めてはおられない。これを含めないことは、「知的労働」の最も重要な要素が看過されていることを意味する。このことは中岡氏が、「労働の意味」を強調される場合にもうかがえる。すなわち、「労働の全体性を回復するということは、労働者に全体が見えるようにすることだ」、「労働が意味を喪失するのは、労働者に全体が見えないからだ」、「労働における全体のつながりが労働者にとって可視的」(『工場の哲学』p.270~271, なお, p.202)であることが重要だ、とされる場合においてである。

さらに、氏が「労働がまだ分業を知らず、「全人的」であった時期」(同, p.200)といわれるのは何時のことであろうか。「労働者に全体が見える」単純協業においても、すでに労働者は労働成果を表象する能力、労働目的を設定する能力等を発揮することはできなくなっており、労働者にとって「全人的」状態ではないのである。又、「労働のための組織も協業の求心力もなかった時代、労働の自発性の最大の目標は仕事そのものの習得、熟練の向上であった」(同, p.200)とされるが果たしてそうであったのだろうか。自己の設定した目的とその達成が「自発性」の最大の原因(もし氏のいわれる時代にそれがあったと仮定して)である。仕事の習得と熟練とはそのための手段である。

26) K・マルクス『直接的生産過程の諸結果』岡崎次郎訳, p.84, 大月書店。

であり、したがってまた、搾取者とその搾取原料（労働者）との間の不可避的敵対によって必要とされている」<sup>27)</sup>のであり、この資本家の指導には二面性があるのである。

かくして、生産過程における「精神的諸力能」の発揮は、単に「手労働」から分離するのみではなく、「手労働」にたいして、「権力」、「支配する力」として「対立」するにいたる。「労働過程は頭の労働と手の労働とを合一する。のちには、それらが分離して敵対的対立を生ずる」<sup>28)</sup>というのはこのことであろう。

このように階級社会の生産体内では、「精神的諸力能」は生産手段の所有者にとってのみ、すなわち奴隷制社会では奴隷所有者にとってのみ、資本制社会では資本家にとってのみ、労働過程におけるその発揮と発展とを許される。しかし協業の大規模化にともない、生産手段の所有者は、その諸「力能」の発揮の場の一部を特殊な種類の労働者に譲り渡す。これは「労働過程のあいだ資本の名で指揮する産業将校（支配人、マネージャー）と産業下士官（職長）」<sup>29)</sup>である。これら監督労働者は、資本家の「精神的諸力能」の一端を担う。彼等の中には、資本の部分機能担当者としての性格と労働者としての性格との二面がある。これも資本の機能の一つである労働力と生産手段の「合理的」な結合を担当している技師等についても同じことがいえる。なお精神的生産の分野においてもこのことは妥当する。精神的生産が組織的に行なわれるようになり、その成果を表象し目的を設定しうるのは、その組織の構成員の一部のみとなり、他のものはその目的に従うのみとなった場合、後者は社会的分業次元では精神労働者として分類されながら、組織内では自主的に成果を表象し目的を設定することはできないということの故に、肉体労働者と類似の側面をもっているとみなすことができる。

さて、マルクスは、「精神的諸力能」の「手労働」からの「分離過程」は協業ではじまり、マニュファクチュアで発展し、機械制大工業で完成するとしていた。マニュファクチュアと機械制大工業とで分離する「精神的諸力能」を検討しよう。

資本制単純協業では、労働者は「資本の特殊の実存様式」ではあり、与えられた労働手段と労働対象、定められた労働時間と労働場所とにおいて、資本の設定した目的のために、資本とその代行者の指揮の下においてではあるが、全加工工程を想定し、自ら加工する次工程の必要を満たす当工程での労働対象に、自らの「熟練」をもって、合法則的・合目的的に向かうことができる。他人によって自らの頭脳に描かせられたものであるが故に、すなわち、資本の「目的」とその指揮、監督下での労働であり、内発的な労働ではないという限界のゆえに、諸法則の把握、再実践、認識の向上、能力の開発などの面で、積極性に欠ける面があるとはいえ、労働者は労働手段である道具を自己に奉仕させ、全加工工程にわたって、対象（自然）に関連し、その諸法則を認識し、「精神的諸力能」を発揮することができた。

27) 『資本論』第一部, p. 556。

28) 同, p. 803。

29) 同, p. 557。

マニュファクチュアにおいても、労働手段が道具であるという点では単純協業と変わりはない。しかし、作業上の分業が発生する。労働過程において労働者は部分工程のみを担当し、労働を通しての対象（自然）認識は部分工程のみに制限される。多くの部分労働者にとっては、担当工程を全工程の中で有機的に関連づけ、全工程の作業方法等を独創的に発展させること等は困難となる。また全工程を担当する習慣を失うとともに、その能力をも失うこととなる。人間の能力は使用しなければ衰退する。すなわち、マニュファクチュアで労働者は「独自の機械」とされ、生涯にわたって細部作業に緊縛され、精神的諸力を発揮する場はさらに狭隘になり、その能力も失なわれる。労働成果の表象や労働目的の設定以外に、各工程の関連とそれらの総合等の面で、資本家とその代行人とが発揮しうる精神的諸力能の場はさらに拡大し、その能力も増大する。以上がさきのマルクスの文章で、マニュファクチュアは「労働者を部分労働者として欠朽せしめる」としていたことの具体的内容である。

機械制大工業においては、労働手段は機械となる。機械は労働者から独立した既成の物質的生産条件（「客体的な生産有機体」）であり、「産業的無窮運動機構」として、労働者に対応する。労働者は機械の付属物となり、機械に奉仕することになる。そして、従来獲得していた熟練の重要性は減少する。すなわち「内容空虚な個々の機械労働者の細目的熟練は、機械体系中に体化されていて機械体系とともに『雇主』の権力をなす科学や膨大な自然諸力や社会的集団労働に較べれば、とるに足らぬ附随物として見る影もなくなる」<sup>30)</sup>のである。

機械制大工業の生産過程は「絶対的に・さしあたり人間の手をいっさい顧慮することなく・その構成要素に分解」<sup>31)</sup>することができる。すなわち、全工程の部分工程への分割、部分工程での作業、部分工程の結合、またそこから生ずる諸問題を、「機械学・科学など、要するに自然科学の応用によって解決する……機械経営の原理」<sup>32)</sup>が採用されるようになり、マニュファクチュア生産の、部分過程の労働者への適合を伴う「主観的な分割原理」<sup>33)</sup>はおおむね不要となり、科学も資本に合体させられ搾取手段として使用されるようになる。かくして、労働者から精神的力能を分離させ、それを奪うのは資本であるということが明瞭になる。

マニュファクチュア段階までもちいられていた人間力が、自然力に代えられると共に生産過程を人間の手を顧慮することなく各構成要素に分解するという事は、労働者に許容されていた経験的熟達自然科学の意識的応用によっておきかえられ<sup>34)</sup>、それに伴ない、マニュファクチュアでは残されていた精神的諸力能の発揮の場が、自然科学の応用に、とってかわられるということである<sup>35)</sup>。肉体労働者に残されるのは単純な「手労働」のみとなる。したがってマ

30) 同, p. 685。

31) 同, p. 774。

32) 同, p. 739。

33) 同, p. 662。

34) 同, p. 630。

35) 同, p. 739。

ルクスは、労働過程における労働者からの精神的諸力能の分離は大工業において完成するとしたのであろう。マルクスのさきの文章で、「大工業」が「科学を自立的な生産力能として労働から分離して資本に奉仕させる」とされていたことの内容はこれらのことである。

以上が、単純協業で始まり、マニュファクチュアで「発展」し、機械制大工業で「完成」するとされた、労働者からの精神的諸力能の「分離過程」の基本的内容としてあげられる。

このように、生産体内における労働過程での、労働者からの精神労働(精神的諸力能の発揮)の分離は、労働力の商品化を前提とする資本制協業での、労働成果を観念・表象し労働目的を設定することの分離に始まり、分業を導入し労働者を部分労働者とするマニュファクチュアで発展し、自然科学を応用し、それによって問題を解決する機械制大工業において完成する。

生産体内で分離した精神労働の担当者が労働者に対立し、後者を支配するようになる点は、社会的分業次元での両労働のばあいと類似している。

生産体内次元での両労働の分業の廃棄ないしは統一をいう場合には、このような内容を持った両労働が前提とされていなければならないであろう。

### 3. 精神労働と肉体労働との分業廃棄・統一についての諸見解

精神労働と肉体労働との統一をはかることが、社会主義における課題の一つとしてあげられてきた。それが労働を意義あるものたらしめるための、生産力を発展させるための、階級を廃絶するための、そして各人の全面的な発展のための、必要条件とみなされたためである。

まず社会主義での両労働間の関係、対立の有無についての見解を考察しよう。

この点についてはほとんど主張が、『ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』に示されているスターリンの見解に依拠してなされているものと思われる。したがってまず、スターリンの見解を考察しよう。

スターリンは、『ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』において、「精神労働と肉体労働とのあいだの対立を絶滅する問題……もまた、つとにマルクスとエンゲルスとによって提起された有名な問題である。精神労働と肉体労働との対立の経済的基礎は、精神労働の代表者たちによる肉体労働をする人々の搾取である。資本主義のもとで企業内の肉体労働をする人々と指導的職員とのあいだに存在していた深い溝は、周知のものである。この深い溝がもたないで、労働者の敵としての、支配人や、職長や、技師や、技術職員のその他の代表者たちにたいする、労働者の敵対的な態度が発展してきたことは、周知のとおりである。もちろん、資本主義と搾取制度との絶滅とともに、精神労働と肉体労働との利益の対立も、消滅すべきではなかった。そしてまた、それはわれわれの現在の社会主義制度のもとでは、実際に消滅した。現在では、肉体労働をする人々と指導的職員とは、敵ではなくて、親友としての同志であり、……彼らのあいだのかつての敵意は、あとかたさえものこっていない。

都市（工業）と農村（農業）とのあいだの、肉体労働と精神労働とのあいだの、諸相違の消滅という問題は、これとまったく異なった性格をもっている。この問題は、マルクス主義の古典の著者達によっては提起されなかった。これは、わが社会主義建設の実践によって提起された新しい問題である。<sup>1)</sup>としている。スターリンはさらに、「文化的 = 技術的水準における深い溝という意味での両者のあいだの本質的な相違」<sup>2)</sup>とし、相違を「本質的な相違」と「本質的でない相違」とにわけ、前者を上のように「文化的 = 技術的水準における深い溝」とし、後者を「作業の諸条件」の相違としている<sup>3)</sup>。そして、社会主義社会で絶滅するのはこの「本質的な相違」であるとしている。

ここでスターリンは、生産体内の分業を中心に精神労働と肉体労働との関係について述べている。すなわち、資本主義の企業内で両労働は対立しており、対立の基礎は搾取にあり、搾取のなくなった社会主義においては、両労働の「利益の対立」は消滅したとし、さらに社会主義での両労働の関係は「相違」という言葉で表現されている。

このスターリンの見解は、スターリン批判（1956年）ののちも、広範な影響を与えてきた。

対立の消滅については、例えば、1958年に出版（1960年邦訳出版）されたソ連邦の『経済学小辞典』は、「生産手段の私的所有の一掃、私的所有から社会的所有への転化、搾取階級の絶滅、社会主義の勝利が、精神労働と肉体労働との対立をなくする」<sup>4)</sup>とし、また、1966年に第一版が出版されたドイツ民主共和国の『社会主義経済学辞典』の第三版（1973年）でも、「社会主義社会においてはじめて、肉体労働と精神労働との間の対立は、生産手段の社会的所有を基礎にして除去される」<sup>5)</sup>としている。

このように、精神労働と肉体労働との対立は社会主義において絶滅しようと規定する点で、ソ連邦の辞典も、ドイツ民主共和国の辞典も、スターリンの説に依拠している。

つぎに、社会主義での精神労働と肉体労働との関連の特徴について、これらの辞典で述べられているところをみよう。

社会主義での両労働の関係を「相違」と規定し、それを「本質的な相違」とそうでない相違とに分ける点でも、スターリンの規定はこれらの辞典の多くの論者によって追随されている。

たとえばソ連邦の辞典は、「本質的な差異」は「社会主義社会における労働者・農民の大多数と、技師・技手の労働にたずさわる働き手との、文化的・技術的水準や労働の性格のうえの差異をいう」<sup>6)</sup>としており、ドイツ民主共和国の辞典は、社会主義社会において精神労働者と

1) スターリン著『ソ連同盟における社会主義の経済的諸問題』飯田貫一訳、pp. 34~35、1953年、国民文庫社。

2) 3) スターリン前掲、p. 37。

4) コズルフ・ベルヴーシン編『経済学小辞典』、ソビエト研究者協会訳、p. 233、1960、青木書店。

5) *Wörterbuch der Ökonomie Sozialismus*, S. 159。

6) コズルフ・ベルヴーシン編、前掲、p. 233。

肉体労働者との間に「文化的・技術的水準の諸相違 (Unterschiede) はある」<sup>7)</sup>としている。

1971年(第一版)に出版された森宏一編『哲学辞典(増補版)』は、「階級社会からぬけだす第一歩である社会主義社会にあっても、まだ両労働の差別は残る。しかしここでは敵対的關係はなくなり、仕事の分野での相違になる」としている<sup>8)</sup>。

このように、社会主義での両労働の関係を、相違・差異・差別であるとして規定する見解は多い。これらはスターリンの規定に追隨してのものと思われる。

それでは、社会主義での相違絶滅の方法についてはどう規定されているであろうか。

スターリンはこの相違絶滅の方法を、労働者の文化的 = 技術的水準を技術職員の水準にまでたかめることにあるとしていた。

なおスターリンは、精神労働と肉体労働との本質的な相違を絶滅することが、工業発展のテンポを高めるために必要だとしている。すなわち、「労働者の大多数が自分の文化的 = 技術的水準を技師 = 技手職員の水準にまでたかめたとしたら、……わが工業は、他の国々の工業には到達できないような高さにたかめられることであろう」<sup>9)</sup>としている。ここには、労働を意義あるものたらしめるためであるとか、人間の能力を全面的に発展させるためであるとかの目的はあげられていない。

ドイツ民主共和国の辞典は、相違絶滅の方法について、「近代技術によって、高水準の社会的生産力の上に、社会主義・共産主義に於て、肉体労働と精神労働の間の本質的相違 (wesentliche Unterschiede) の徐々に縮小が生じる」<sup>10)</sup>と、近代技術の発展による高水準の生産力の発展をあげている。

また、「この諸相違 (Unterschiede) は最初徐々に克服されるが、共産主義社会の最高の発展段階に至る迄残存する。この諸相違克服の為の主要機動力は、科学的・技術的進歩である。近代的工業および農業生産の発展、生産過程の部分的・全面的機械化や自動化とともに、より高い技術的かつ一般的教育が必要となる。統一的社会主義的教育制度は、各々の人民に、その能力と志向に適合して、自らを全面的に発展させる可能性を与える」<sup>11)</sup>としている。

この点は、ルーマニア共産党の綱領においてもどうようで、そこでは生産力の発達、生産関係の変化、労働者の自覚および条件の向上、生産過程の機械化・自動化・自動制御化、が重視されている<sup>12)</sup>。

---

7) *Wörterbuch der Ökonomie Sozialismus*, S. 465.

8) 森宏一編『哲学辞典(増補版)』, p. 256. この辞典は「編集にあたっては、とくにソ連邦やドイツ民主共和国(東ドイツ)の現在の哲学の成果を参考にし、またそれらを役立てた」(同辞典「増補版発刊にさいして」)といわれる。

9) スターリン前掲, pp. 36~37.

10) *Wörterbuch der Ökonomie Sozialismus*, S. 159.

11) *Ibid.* S. 465.

12) *Programul partidului comunist roman*, p. 105, Editura politica, bucurești, 1975.

このように、ソ連邦の辞典はもちろんドイツ民主共和国の辞典も共に、精神労働と肉体労働との関係を「相違」と規定する点において、また相違除去の方法において、スターリンの『ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』に、基本的には依拠しているといえる。

さきの森宏一編の『哲学辞典』では「精神労働（学者、芸術家、僧侶、教師、医師、弁護士、技術者が具体例としてあげられている——引用者）にたずさわる人びとも、肉体労働にたずさわる人びとのあいだからの出身者となるし、また肉体労働でおこなわれた直接の生産も、技術の進歩によってしだいに高い文化・技術的水準がもとめられるようになって、この方面からも両労働の実際の接近がすすめられる」<sup>13)</sup>としている。

重要なのは両労働の接近ではなく、統一ないしは分業の廃止である。しかもこの辞典でいわれている接近は、肉体労働者層出身の精神労働者の存在である。これは社会的分業次元での、また生産体内分業次元での、個々の人間にとっての精神労働と肉体労働との接近ですらない。生産体内次元では、労働過程で個々の人間の精神的諸力能と手労働とが分離することなく發揮されることが、労働目的の設定者と被設定者とが分離することなく統一されることが、また社会的分業次元においては、精神労働者と肉体労働者との間の支配・被支配関係が揚棄されることが、そして統一への過渡期においては少なくとも統一への方向にあることが、統一ないしは接近ということの内容でなければならない。

また、直接生産をおこなっている肉体労働者が、技術進歩によって高度の文化的・技術的水準を獲得したとしても、そのみでは両労働の統一とはいえない。生産体内の生産過程に限定してみても、精神的諸力能と手の労働との個々人においての統一が、個別的労働であるか社会的労働であるかを問わず、必要である。重要なことは統一される両労働の内容である。

さてここで、スターリンの規定とそれに追随する諸見解の問題点を指摘しよう。

まずスターリンは、資本主義での精神労働と肉体労働との具体例を生産体内分業次元からのみあげ、国務等々社会的分業次元からはあげていない。これは精神労働および肉体労働という言葉の矮小化された規定と相互関係にあり、社会的分業次元での精神労働と肉体労働との対立を軽視し、それらの差の存在を容認する理論ともなりうる。これはまた、社会主義での精神労働者による肉体労働者の支配を無視する結果をまねき、官僚等の社会的指揮を担当する階級による一般国民への支配や特権の存在を許容する、一般的に言って、社会的分業次元での支配・被支配関係の存続を許容する理論的要因ともなりうると思える。

また精神労働と物質労働との最大の分業とされる「都市と農村の対立の止揚は、共同社会(Gemeinschaft)の最初の諸条件のうちのひとつである。そして、その条件は条件で、一群の物質的諸条件に依存しており、だれの眼にもすぐわかることだが、たんなる意志だけでみすことはできない。(これら諸条件はもっと解明されなければならない)」<sup>14)</sup>と、両労働の分業の

13) 森宏一編、前掲、p.256。

14) マルクス・エンゲルス『新版ドイツ・イデオロギー』、花崎舉平訳、p.108。

廃棄，対立の止揚にはそれへの意志とともに物質的諸条件の存在が必要だとされている。現在の社会主義にはたしてそのための物質的条件があるといえるのであろうか。

社会的分業次元での両労働の分離とその固定化は，生産力の一定の発展水準を前提としていたとはいえ，十分に発展した水準のものではなかった。両労働間の分業の廃棄ないし統一には，各人が社会の共同業務に参加しうることが含まれる。これがなければ社会的指揮は特定集団に帰属し固定化し，その集団は労働者を支配し搾取する階級になる可能性がある。社会の共同業務への各人の参加には，高度に発達した生産力の存在が前提となる。したがって，生産力の水準を無視して，両労働間の対立は廃棄されたと主張することはできないではなからうか。

マルクスが『ゴータ綱領批判』において，「共産主義社会のより高度の段階で，すなわち個人が分業に奴隷的に従属することがなくなり，それとともに精神労働と肉体労働との対立（Gegensatz）がなくなったのちに」<sup>15)</sup>と，共産主義社会の低次の段階での，精神労働と肉体労働との存続を示唆するとき用いた表現のように，社会主義社会においても，個人の特定の仕事への緊縛・従属が存在するのであり，したがってそこには両労働の分業・対立が存在するとみなすべきであろう。

また，社会主義は階級社会であり，階級を再生する社会である。階級の存在を前提として，精神労働と肉体労働との対立が絶滅したとすることはできないであろう。

スターリンとその主張を受容する論者達は，社会主義における両労働の関係を相違と表現している。そしてこの相違の解消という問題は，マルクス主義の古典の著者達によっては，提起されなかったとしていた。既述のとおり，社会主義での両労働の関連を相違という言葉によって表現することはできないと思われる。だが，つぎにその相違除去の方法について述べられているところを検討しよう。

両労働の分業関係の変化のためには，生産力の発達が必要であるという点では，マルクス，エンゲルスの主張と，スターリンをはじめとする主張とは類似している。しかし，マルクス，エンゲルスは，生産力の発達を分業廃棄・両労働統一の条件としていた。たとえば「大工業によってなしとげられた生産力の巨大な増大によってはじめて，例外なくすべての社会成員に労働を割り当て，そうすることによって各人の労働時間をいちじるしく短縮して，社会の全般的な事務——理論的な，また実践的な——にたずさわる十分な余暇がすべての人々に残されるようにすることが可能になる」<sup>16)</sup>と。

これに対して，スターリンをはじめとする主張は，生産力の発達を両労働間の相違・差異・差別廃棄の条件としている。しかも，そこで強調されているのは，生産体内次元での精神労働と肉体労働とであった。既述のとおり，スターリンをはじめとする主張は，両労働間の分業の廃棄ないしは統一と生産力発達との関連を，また両労働間の分業廃棄ないしは統一の意味を，

15) 『マルクス・エンゲルス全集』，第20巻，p. 21。

16) 『マルクス・エンゲルス全集』，第20巻，p. 188。

矮小化していると思える。

両労働を、社会的分業次元でと生産体内分業次元でとの両次元において正確に把握し、両労働間の分業の廃棄ないしはそれらの統一が課題とされなければならないはずである。

社会的分業と生産体内分業との関係をマルクスは、「資本制生産様式の社会では社会的分業の無政府性とマネーフラクチュア的分業の専制状態とが相互に制約しあっている」<sup>17)</sup>とし、そして、「工場における権威と社会における権威とは、分業については、相互に反比例している」<sup>18)</sup>としている。資本主義で、市場・「競争の権威」を前提として各生産者（資本家、独立生産者）は、自己の権限と責任とにおいて生産をしている。すなわち、生産に関しては、社会における権威より生産体における権威が優位している。これに反して、社会主義においては、主要な生産手段は社会的所有とされ、計画経済が推進される。したがって、生産に関しても、生産体における権威より社会（それを統括する国家）における権威が優位することになり、先にみた、社会的分業次元での精神労働も、生産体内分業次元での精神労働（精神的諸力能の発揮）も共に、国家に、基本的には帰属することになる。

以上より明らかに、社会主義での精神労働と肉体労働との分業の廃棄ないしはそれらの統一は、労働を主体的たらしめ、人間を全的に発展させ、生産力を発展させる条件として、社会的分業次元でと生産体内分業次元でとの両次元においてなされなければならない。マルクス、エンゲルスの古典の意味するところはそうだと思える。

## む す び

精神労働と肉体労働との統一ないしはそれらの分業の廃棄という課題は、つとに提起された、しかしその具体化のためにはさまざまな物質的諸条件を必要とする、実現の困難な課題である。

本稿では、両労働の分業の廃止ないしは統一のための物質的条件の検討ではなく、現在両労働についてなされている支配的な規定を検討した。

いうまでもなく労働とは労働力の使用であり、労働力は精神的能力と肉体的能力との総合によって構成されている。従来の代表的な規定にみられる特徴は、主として使用する労働能力の種類ないしは労働力を支出する身体の部位によって、労働を精神労働と肉体労働とに分類し、しかも社会的分業次元でと生産体内分業次元でとに区別することなく、それらの規定を使用している点にあった。そのような分類も、両労働の特徴の一つを規準にしてなされたものであり、ある合理性をもっているとは思える。しかし、両労働の分離そのものが、一定の歴史的条件の下で発生したのであり、そのことがそれぞれの労働能力の使用内容を限定しており、両労働の規定にさいしては、このことを考慮する必要があると思える。特に両労働の分業の廃棄ないし

17) マルクス『資本論』第一部, p.589。

18) 同, p.592。

は統一が目的とされているときにはそのことが重要である。

社会的次元での両労働の分業と特定の人間へのそれぞれの固定化は、生産力の一定の発展水準ではじめて発生し、精神労働の一部である社会的指揮の担当者はそれを搾取機能へと転化させ、自らは支配階級となりえた。精神労働者に属する他の人間は直接間接これを支える役割を担うこととなり、程度の差はあれ支配階級に属することとなった。なお生産力の発展、産業構造の高度化は、物質的生産に直接関与しない人間を相対的に増加させ、支配階級に属しているとはみなしえない人間を増加させているとはいえよう。しかし、精神労働の規定にさいしては、精神労働の肉体労働からの分離そのものが階級の発生と結合しているということを、したがって支配・被支配関係の発生と結合しているということを閑却してはならないように思う。

階級社会で物質的生産に関与する生産体内分業次元での、精神労働と肉体労働との分離・固定化は、協同労働、協業と共に始まる。協業はそれを組織し代表する人間を必要とする。その任務は生産手段の所有者に帰属する。労働過程での精神労働（労働の成果を表象し労働目的を設定することに始まる精神的諸力能の一連の発揮）は労働者から分離し、生産手段の所有者とその代行者に帰属し、労働者はただ「手の労働」をおこなうのみとなる。すなわち、階級社会の生産体内分業次元での精神労働と肉体労働との分離も、その発生の要因は相違するが、社会的分業次元での両労働のばあいとどのように階級関係、支配・被支配関係と結合している。

精神的生産の分野においてもそれが組織的におこなわれるばあいには、そのなかに指揮・被指揮、支配・被支配の関係が発生し、そこでの被指揮・被支配者は、社会的分業次元では精神労働者でありうるが、生産体内分業次元では物質的生産分野における肉体労働者と類似の位置にあり、したがって二面性をもつことになる。

社会主義で両労働の分業の廃棄ないしは統一を課題とするばあいは、両次元での両労働の特徴、その発生の相違性と階級支配面の共通性とを考慮してなされなければならないであろう。

多くの社会主義国の指揮者は人民の信頼を得ることに失敗したと思える。その一要因として、「支配階級がひとたびその座にすわったなら、かならず労働する階級を犠牲として自分の支配をかため、社会的指揮を大衆の搾取に代えてきた」（『マルクス・エンゲルス全集』第20巻，p.290）という言葉の妥当する関係の存在が挙げられるのではなからうか。すなわちこの言葉が妥当するとしなければならない階級が、社会主義国には過去に存在し、現に存在するとしなければならないのではなからうか。

両労働の分業の廃棄ないしは統一に最も必要なものは、それへの意志と、それを可能にする制度的諸条件および、生産力の高度の発展をはじめとする物質的諸条件であろう。したがってその制度的・物質的諸条件の検討が、統一すべき両労働の正しい規定と統一を可能にする政策の検討と共に必要と思える。だが本稿では考察を両労働の規定に限定した。（1990.11.24）